

『十二門論宗致義記』における「無障礙」

——行との関連を中心に——

中 西 俊 英

1. はじめに

後世、華嚴宗第三祖に位置づけられた賢首大師法蔵（643-712）は、『華嚴經』に関する著作のみならず、その他の大乘論書についても数多くの著作を残している。特に『大乘起信論義記』（以下『義記』）などは東アジア仏教思想に大きな影響をあたえた著作として有名である。ただし、法蔵若年期の著作とされ、中観思想を説く『十二門論』¹⁾の註釈書である『十二門論宗致義記』（以下『宗致義記』）のなかにも、議論にあたいる様々な論点が存在している。

諸法が相即相入して無礙であることの論拠について、法蔵『華嚴一乗教義分齊章』（以下『五教章』）は「縁起因門六義法」をたてる。しかし、法蔵『華嚴經探玄記』（以下『探玄記』）は「縁起相由」と「法性融通」の二つの論拠をたて²⁾、思想の変化が確認される。この「縁起相由」と「法性融通」については、『探玄記』が「余門如旨歸中説」と述べる³⁾ことから、『五教章』以降『探玄記』以前の著作⁴⁾である『華嚴經旨歸』（以下『旨歸』）以降に説かれたとされる⁵⁾。しかし、『旨歸』以前の著作である『宗致義記』にも「法性縁起融通無礙門」などの名称が確認され、無礙の論拠としての両者が説かれている。本論文においては、この記述を出発点とし、「法性縁起融通無礙門」の考え方について、『宗致義記』に説かれる無障礙のあり方とあわせて考察したい。

2. 『十二門論宗致義記』法性融通無礙門

法蔵『探玄記』において説かれる諸法の無礙の根拠としての「縁起相由」と「法性融通」のうち、「縁起相由」は「縁起因門六義法」の考え方であり、そもそもは智儼（602-668）が『十地經論』の因の六義にもとづいて発案した⁶⁾とされる。もう一つの「法性融通」については『旨歸』以降に頻出するが、『旨歸』以前の著作である『宗致義記』にも以下のように説かれている（※ [A] [B] は筆者挿入）。

二亦遮亦表。[A] 如『地論』云、「因不生。緣生故。緣不生。自因生故。不共生。無知者故。作時不住故。不無因生。隨順有故。」又『對法論』云、「自種有故不從他。待衆緣故非自作。無作用故不共生。有功能故非無因。」凡諸緣起亡双句者、已為甚深。況總亡四句。是故緣起最極甚深。解云。此二論意以因為自。用緣為他。此因與緣相待故各有二義。一有力義。二無力義。以因無為緣有故不自生。以緣無為因有故不他生。一有一無無二故不共生。二有二無不俱故亦不共生。則由此無性方得起此不起之果。故不無因。不無如此不自不他不共之因故也。[B] 若約顯法性緣起融通無礙門說者、四門俱有作。何者、謂因緣各有三義。一有。二無。三亦有亦無。各別開初義故自作亦他作。合第三義故共作。合第二義故無因作。以各無力故。此同從無住本立一切法。(T42: p.228b-c)

[A] では『十地經論』『對法論』(大乘阿毘達磨雜集論)を引用し、有力・無力の観点から説明している。これは『五教章』の「緣起因門六義法」にならった考え方、すなわち後の「緣起相由」的な考え方である。他方、[B] では「法性緣起融通無礙」なる考え方が説かれている。この両者は緣起の二つの見方であり、[A] は「遮」すなわち否定的表現によって、[B] は「表」すなわち肯定的表現で、緣起の最極甚深なさまを表裏一体に説明している。

比較のために、『探玄記』が説明をゆずる『旨歸』の説明を確認しておきたい。

九、緣起相由力故者、謂一与多互為緣起相由成立故。有如此相即入等。此有二種。一約用。有有力無力相持相依。故有相入。二約体。全体有空能作所作全体相是。故有相即。(中略)

十、法性融通力故者、謂若唯約事相、互相礙不可則入。若唯約理性、則唯一味不可則入。今則理事融通、具斯無礙。謂不異理之事具攝理性時、令彼不異理之多事。隨彼所依理、皆於一中現。若一中攝理而不尽、即真理有分限失。若一中攝理尽、多事不隨理現、即事在理外失。今既一事之中全攝理、多事豈不於中現。(T45: p.595b)

「緣起相由」では『宗致義記』同様に有力・無力の考え方をを用いて説明しており、いわば伝統的な「因の六義」の考え方である。一方、「法性融通」については、理の不可分限な性質を前提としての一と多との無礙の説明であり、法性融通の力による無礙というのは同じであるが、『宗致義記』と異なっている。

『宗致義記』の[B]の解釈では、「無因の作」、つまり因と縁とが無(力)であっても無礙が成り立つとされており、それは「無住の本より一切法を立つ」と同じとされる。「無住の本より一切法を立つ」は『維摩經』が典拠⁷⁾であり、「無住の本」は「[最早それ以上の]基体をもたないもの」「万物の最終的基体」とも訳される⁸⁾が、本論文では、ひとまず、平井俊榮[1976: p.50]の「何ものにもとらわれない」という空の実践的側面をあらわすことばとして解釈したい。なお、同論文は、「顛倒の住著を破する無著無執の精神」として、吉蔵(549-623)

(24) 『十二門論宗致義記』における「無障礙」(中 西)

が「無住」を強調していたことを指摘しており、法蔵への思想的影響が考えられるが、この点については稿をあらためて論じる。

諸法の無礙なるあり方において、行の実践に対する問題意識が含まれていること、それは『宗致義記』の以下の記述によって裏づけられる。

如是等文。皆明以有真空故。方有諸法也。又由觀真空。方成諸行。是故十度等行。皆由空成。菩提等果。皆由空立。是故從此真空無住建立諸法。又令諸法得相即相入無障無礙等。(T42: p.217c)

ここでは、真空を観察することによってこそ十波羅蜜などの行は成り立つとされ、行の根本には真空の観察すなわち真空観がある。そして、「真空無住より諸法を建立する」と述べられ、この真空によって成り立っている諸法は「相即相入無障無礙」であるとされる。これと、上記の[B]の解釈とをあわせて考えると、法性縁起融通無礙門では、「真空無住」ということが無礙において重要な概念であり、それは行(真空観)と密接に関連しているといえる。

3. 「無障礙」と行

無礙と行との関連については、『宗致義記』における『十二門論』本文の「無障礙」の註釈からも確認することができる(※[1]～[3]は筆者挿入)。

無障礙者。此有三義。[1] 一約境。謂真空不礙万行。万行不礙真空。故云無礙。亦乃即真空為万行。万行未嘗不空。即万行為真空。真空未嘗不行。故云無礙也。[2] 二約智。謂照空之智。則具万行。万行即智。無有障礙。故云若通達。通達則是智也。[3] 三約俱融。謂智有二義。一從縁虚故。虚無不尽。智同境也。二虚尽唯空。未嘗失照。境即智也。以即空之妙智。還照即智之真空。是故終日照而無照。終日境而無境。無境無智而境智宛然。故名通達。亦云無障礙也。(T42: p.220a-b)

註釈対象である『十二門論』の本文は、「大乘に通達すれば、六波羅蜜を具足して無所障礙である」⁹⁾であり、法蔵は[1]「境」・[2]「智」・[3]「境と智の両者」、という三つの観点から註釈している。真空の観察が行であって、それによって能観の智と所観の境とが無礙であること(境智俱融)、それが「(大乘に)通達」することであるという。

この真空の観察のあり方については、『宗致義記』は以下のように定義する。

三定智者。亦二。一解。謂於前真空。善分析揀択。不与三種空乱意相応。又亦解知此解。与行不同。若不爾者。於此法上墮不生解。則謂此解便是行心。非正理故。不名解

也。二行。謂以行心觀正理時，決定不如前之所解，以解不能至故。行心順法，亡情念故。謂於真境，不作空解，不作有解，不作俱解，亦不作俱非解。於一念間，一切解心動念總絕。亦無不動之解。所解亦絕。此絕亦絕。境智俱融。於一念間。此謂情開理現，難可宣說。至者當知，龍樹說空，意在於此。(T42: p.217c)

『宗致義記』における真空觀の説明¹⁰⁾は、「識病(病の認識)」「揀境(対象の区別)」「定智(智の定義)」の三カ所から成っており、この箇所は三番目である。ここではまず空を解することについて説明した後、その解とは異なる行について説明している。行は「行心」とも述べられ、あらゆる虚妄な分別がつきて、空・有の一方にかたよらない心のあり方である。この行心においては、所觀の対象も絶し、能觀における絶するということも絶し、智と境とが無礙(境智俱融)である。そして、それは一念のうちであるという。

また、この真空觀の説明のすぐあとに、「顯徳用(觀察のはたらき)」として、上述の「從此真空無住建立諸法，又令諸法得相即相入無障無礙」が述べられ、ここから『宗致義記』の無障礙における行(真空觀)の重要性がうかがい知れよう。

4. おわりに

法蔵は著作において具体的な行について言及することはあまりなく、『義記』では、特に止の修行について、「広如天台顓禪師二卷止觀中說也」¹¹⁾「此等皆如禪經中及顓禪師止觀中廣說」¹²⁾などと述べ、『天台小止觀』等に説明をゆずる。ここから法蔵は行などの実践に対する関心は薄いと考えられることもあるが、彼の伝記『大唐大薦福寺故大徳康蔵法師之碑』には16歳で指を焼いて供養したとの記載がある¹³⁾。また、『梵網經菩薩戒本疏』で焼身供養を説く『梵網經』第16輕戒を註釈する際には、「諸仏を供養し、衆生を救い、また法を求めるためには菩薩は命を惜しまずに身をもって供養するのだと述べ、実際に身や肘や指を焼くことは否定しない」¹⁴⁾という。それゆえ、行に対する意識は強かったとも考えられるが、具体的な内容についての記述はあまり存在しない上、觀行を説き法蔵撰とされる華嚴觀法文献も、作者についての問題が指摘されることから、法蔵における行の内容を考察するのは容易ではない。この問題については、法蔵のみではなく、法蔵周辺の問題意識として、彼の周辺で編纂されたと考えられる『法界觀門』などの觀法文献を含めて考えていきたい。

なお、「法性融通」という無礙の論拠がなぜ考案されたかについては、円測の『仁王經疏』との関連が指摘されている¹⁵⁾。法蔵には『旨歸』以前の著作に『華

(26) 『十二門論宗致義記』における「無障礙」(中 西)

『嚴經明法品内立三宝章』という当時の彼の関心をまとめた研究ノートにも似た著作があり、ひとまず本論文では、法蔵が様々に試行錯誤していくなかで、『旨帰』の「法性融通」の考え方にいたったのではないかという結論にとどめておき、今後は同時期の華嚴以外の文献も対象に含めて幅広く考察していきたい。

〔付記〕本論文を執筆するにあたっては、石井公成・蓑輪顕量の両先生から貴重な助言をいただいた。この場をかりてあらためて感謝の意を表明したい。

- 1) 『十二門論』は鳩摩羅什が翻訳した中観系の論書、また三論の一つとしてよく知られている。極めて簡潔な論書で、偈頌と長行から成り、漢訳のみ存在する。「龍樹菩薩造」とされるが、先行研究を参照するに、その可能性は低い。(『十二門論』のテキスト論については、五島清隆〔2002〕などを参照。) なお、法蔵は作者問題に言及していない。 2) T35: p.173c. 3) T35: p.125a. 4) 本論文における法蔵の著作の撰述年代については、吉津宜英〔1991: pp.130-150〕を参照。 5) 吉津宜英〔1985: p.121〕など。 6) 大竹晋〔2007: p.310〕。 7) T14: p.547c など。 8) 『維摩経』の「無住の本」の訳については、松本史朗〔2005: p.15〕を参照。 9) 「若能通達是義，即通達大乘，具足六波羅蜜，無所障礙。」(T30: p.217c)。 10) T42: p.217b-c. 11) T44: p.283b. 12) T44: p.284b. 13) T50: p.280b. 14) 石井公成〔1996: pp.334-335〕。 15) 大竹晋〔2007: pp.367-368〕。

〈参考文献〉

- 平井俊榮〔1976〕「〈無住〉の概念の形成と展開」、『駒澤大學佛教學部研究紀要』34, pp.48-63.
 吉津宜英〔1985〕『華嚴禪の思想史的研究』, 大東出版社。
 吉津宜英〔1991〕『華嚴一乘思想の研究』, 大東出版社。
 石井公成〔1996〕『華嚴思想の研究』, 春秋社。
 五島清隆〔2002〕「『十二門論』の構成と著者問題」, 櫻部建博士喜寿記念論集『初期仏教からアビダルマへ』, 平楽寺書店, pp.447-465。
 松本史朗〔2005〕「如来藏思想と本覚思想」, 『駒澤大學佛教學部研究紀要』63, pp.1-29。
 大竹晋〔2007〕『唯識説を中心とした初期華嚴教学の研究——智儼・義湘から法蔵へ——』, 大蔵出版。

〈キーワード〉 法蔵, 真空, 観法

(東大寺華嚴学研究所研究員)